

てのひらのドラゴン

絵 あるえ 文 かなりひこくま



幹の半分を失った桜の木が立っていた。去年の、とある嵐の夜。桜は雷の直撃をうけたのだ。タロットカードの塔さならながら。まさに運命。嵐が過ぎた翌朝、公園の管理者は縦に裂けた桜を見た。彼は業者を呼び、この桜をどうするか相談した。彼らは丈夫な丸太を組み、添え木をする道を選んだ。縦に2分の1になった桜が今度は横に2分の1、ポキリと折れてしまわないように。いまま桜は松葉杖をついた人のようだけど、春にはいっぱい花を咲かせた。



シリアルという名のキッチン用品店

母は、もちろん優しい。けれど。キッチン用品店に行ったときの母は、なぜか妙に恐ろしかった。肉たたきを手にとり、手ひらをポンポンと叩いてみる母。圧力鍋を持ち上げ、その重量を確かめる母。先の尖ったピーラーも、銀色に輝くチーズおろしも、すべて不気味に見えたが。私が一番、怖いと思ったのはドイツ製の製麺機である。



霧中に泳ぐ

扉を開き屋上に出て、恐る恐る私は歩いた。濃い霧だ。突き出した自分の手さえかすんで見える。ひたすらに白く息苦しいほど。縁にたどりつき靴を脱いだ。両手を広げジャンプ！..... 思ったとおり、うまくバランスをとれば、落下は緩やかなものだった。あとは地上に落ちるまで細く息を保ち、カエル泳ぎすればいい。



ひとりごと

自信のない人ほど、ひとりごとを云いがちだそうだ。本でそう読んで以来なんとなく、ひとりごとだけは口にすまい、と心に決めていた。けれど今夜、顔を洗って鏡を見ると疲れた顔があって、少しイヤになった。心のなかで.....とつぶやいた。すると目の前の口がゆっくりと動き.....シ・ネ・バ?.....と聞こえた。やはり疲れていると思い、すぐに電気を消して横になったけど。鏡の前には、まだ誰か立っている気がした。



もらった種

姉からもらった、ひと粒の種は4月、ぶじに芽をだした。6月の雨をすい、7月の日差しに生い茂り、.....いま、牙をむいている。



すべてを台無しにする呪文

「すべてを台無しにする呪文を考えたわ。聞きたい？」.....と彼女は言った。ぼくとしては相手にしない。魔法なんて信じないし。すると彼女はこう言った。.....「これが最後通告よ、聞きたい？」.....なんだか分からないけど、とても恐ろしくなり。ぼくは全力で謝った。



水を蹴るネコ

美術館で1枚の絵を見た。1匹のネコが水しぶきをたて、溺れている絵だ。絵は水中と空の部分に7対3くらいで分割されていて、ネコが蹴る水の奥では魚がのんびり泳いでいる。なぜネコは水に落ちたのだろう。分からない。.....でも水面の奥の方にはボートが浮かんでいて、釣り人が糸を垂れているから。.....もうすぐ気づいてもらえるかも.....と思った。



金魚鉢

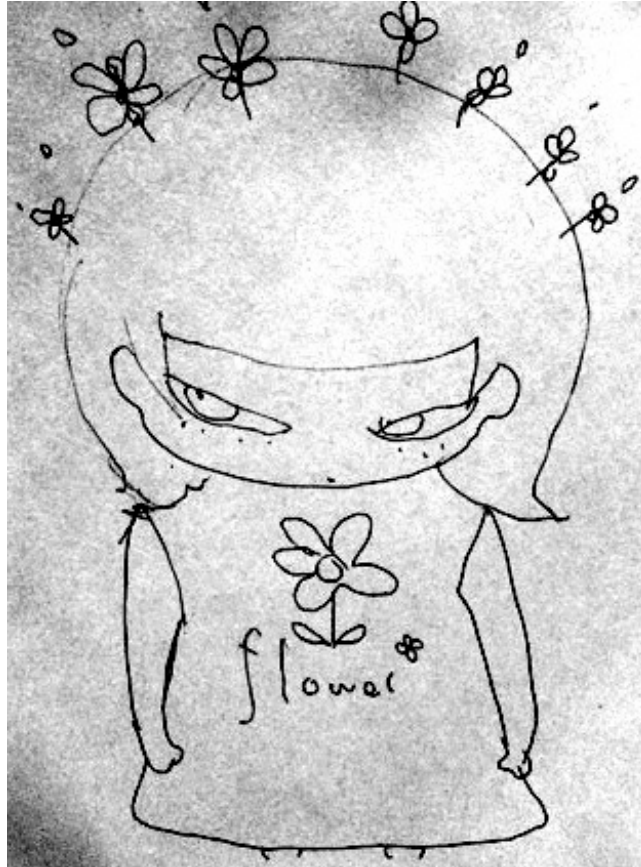
公園で。隣に座った男の頭は金魚鉢だった。鉢には流木が沈められており水草が揺れていた。目をみはり私は言った。.....「綺麗な水ですね。透明だ」.....男は驚いたようだった。不躰だとは思いつつ、私はさらに尋ねた。.....「そのう。金魚は飼わないのですか？」.....水面に波紋が広がった。

.....「金魚鉢。そうかもしれませんね。すべては金魚鉢と言えないこともない。人は金魚鉢に住まい、たとえ金魚鉢を出ても。また金魚鉢。無限の金魚鉢の重なり。それが人生」.....そう言って金魚鉢男が立ち上がると、逆光に鉢が輝いて見えた。.....「いってみただけです。お気になさらないで」



鏡と瞳と美人

鏡は恐ろしい。禍々しい物語に引き込まれそうな気がするから。だが人の瞳はそれ以上の何かだ。人の目は恐ろしい。でも美人さんは、それらと相性がいい。美人さんは鏡と人の視線によって彫刻されたのではないか？ 鏡 < 瞳 < 美人 の順番で恐ろしい。



ゾンビの小指

ゾンビ達はお互いに好感を抱いていた。でもどう愛を表現すればいいのか、よく分からなかった。ある日。女ゾンビは思いついた。彼女は自分の左の小指をボキリとへし折ると、男ゾンビに手渡したのだ。男ゾンビは何ごとかと考えこんだ。空を見て、渡された指を口に放り込んだ。もぐもぐ。



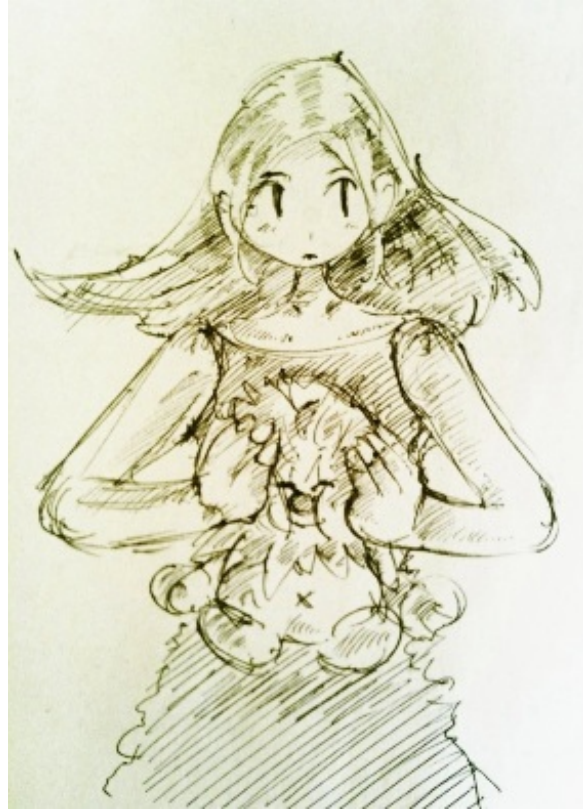
愚者のカード（しっぽつき）

恋は盲目。日頃、われ関せずとクールな彼女も。見事な愚か者になる。愚者のカードは熱狂。そんな季節なのだ.....とはいえ。ほんと困ったものだ。春のネコ。



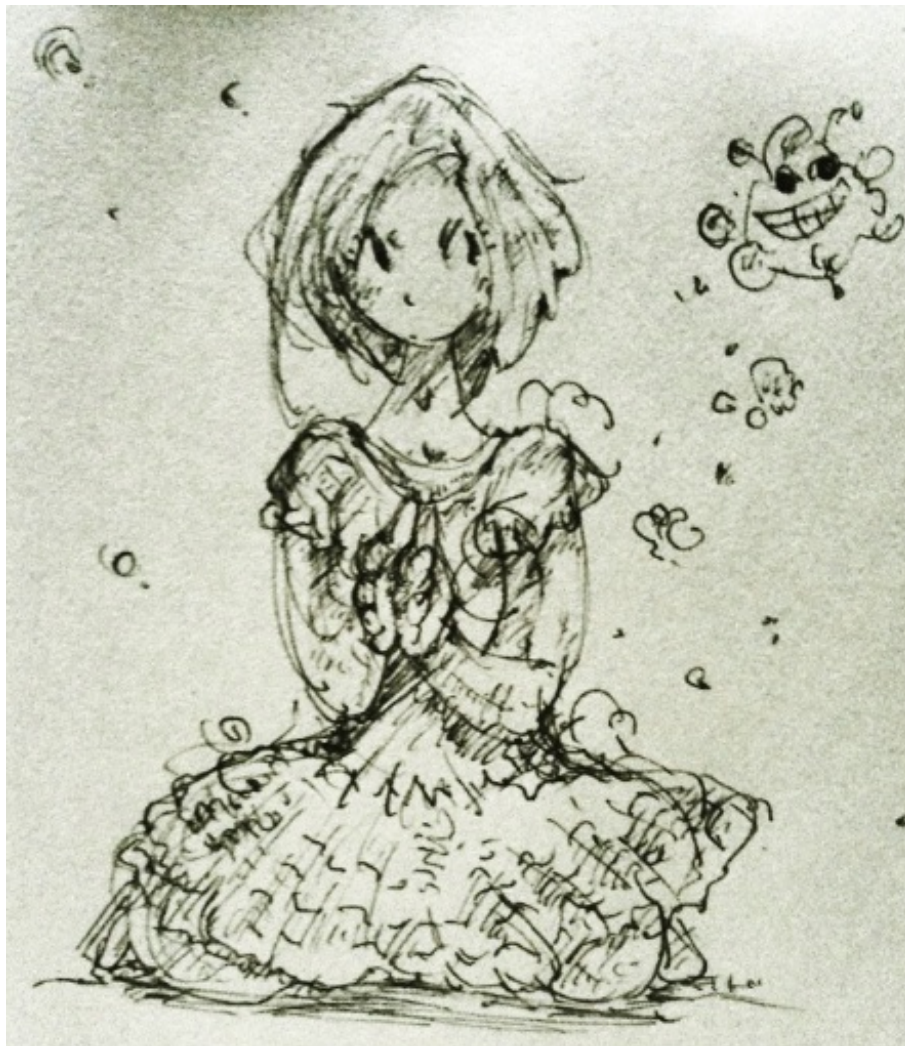
唱えよ

お話を書いていて急に目眩がした。自分がよそよそしく感じられ、まるで赤の他人。こっちがお話の登場人物みたいだ。デジャヴはデジャヴに重なり、踏みしめるべき大地は霞んで見えない。他人の私が呪文を思い出そうとしてる。唱えよ！.....とっぴんぱらりのぷ.....



彼女の船旅

ソファで横になっていた彼女の、隣に座ったら目を覚ました。そして.....「ここは家だっけ？」.....と聞くのだった。寝ぼけてるらしい。どこだと思った？と聞いたら.....「船」.....と彼女は答えた。大きな船？と聞いたら.....「うん」.....と頷いた。その船にはぼくもいたかな？と尋ねたら。目をそらした。



お引越し

可憐な少女の霊が出るという屋敷が取り壊されそうになった。救ったのは外国のお金持ち。彼は屋敷ごと船に積み込むと、新大陸に移築した。少女も住み慣れた家についていったらしい。...
...「ったく、可愛いと得だよね」.....とは姉の感想だ。



木の根

うつむいて歩くと見てしまう。古い木の根っこ。地面をわしづかみにして盛り上がり、少しこわい。でもそれをいえば 空を抱こうとしてひろがる 枝だって.....



いわずもがなのなにかしら

夜。いわずもがなのなにかしらを訪れた。いわずもがなのなにかしらは古い友人のような顔をしてお茶を飲む。勝手に！ひどく腹立たしいが。私は、いわずもがなのなにかしらに対して完全に無力だ。後ろから忍びより、エイヤツと包丁で斬りつけても無駄なこと。断ち切れない、というのがいわずもがなのなにかしらの性質なのだ。私はもう諦めた。一緒にお茶を飲むしかない。



恋文

母の趣味は恋文。ラブレターを書くことだ。中学の頃に書きだして、卒業式に渡しそびれたらしい。まだ完成ではない、というのが母の考えで。以来ずっと手元に置き、ときどき手を入れては温め続けている。いったん書き始めたからには、人はより良く書かずにはいられない……そうだ。

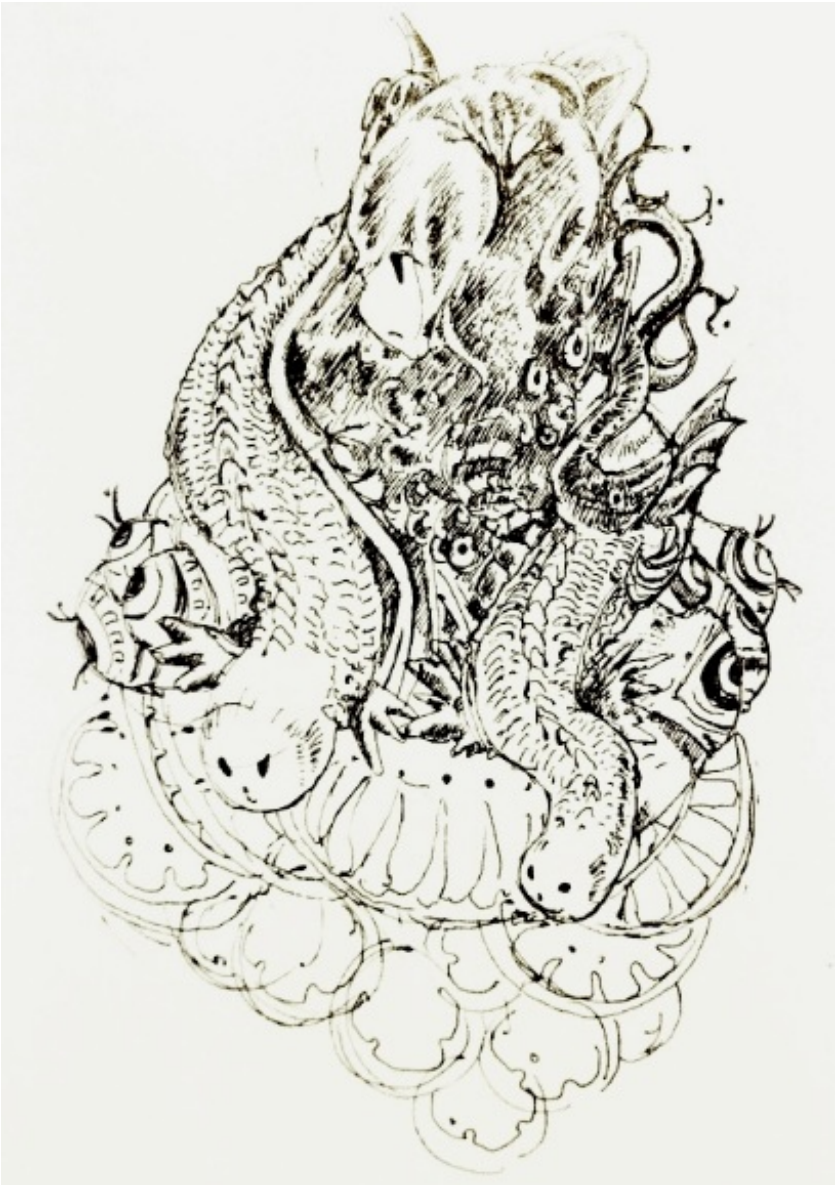


わたしは彼が好きで、彼は彼女が好きで、わたしはそれが気に入らない。彼女はわたしの親友だが、わたしは彼女を消すことにした。.....改めて、「きみが好き」とわたしは彼に言い、彼だってわたしが嫌いってわけじゃないけど。また別の彼女がきて。わたしと彼女は親友になるのだった。



静かな朝。私は尋ねた。……「私は君を愛してるけど、君は？」……彼は答えた。……「あまり、愛してない」……私は窓を開き冷たい空気を吸い込んだ。「じゃ、私も。愛してるのやめる」
こうして恋人と別れた私は子犬を飼うことにした。戯れに彼と同じ名をつけた。悪意は否定すまい。だが、われわれは仲良く暮らした。犬の成長は速い。老いるのも速い。平均的な寿命のときが訪れ、別れを告げた。彼の名前にも。長い長い魔法がとけて、今は少し虚しい。







- ・ あるえさんのツイッター <https://twitter.com/#!/aruerula>
- ・ あるえさんのidページ（はてなハイク） <http://h.hatena.ne.jp/id/ARUE>

この本は2012年の4月に集中的に編まれた
が
描かれた絵、書かれた文章は、また別
それぞれ違う場所で、違うときに、べっこにかかれたものだ
「一緒に本をつくろう！」……と言ったのはぼくで
「別にいいぞ」……ってこたえてくれたのが、あるえさん
そうやって、この本はできた
ありがとう！

2014年4月28日
かなりひこくま

